

自然学校の役割

大杉谷には、山や川など、豊かな本物の自然があります。大杉谷自然学校は、この自然をフィールドに、生きものの観察や川遊び、魚とり、工作などを体験できるプログラムを用意しています。

自然が本物と言うことは、そこに潜む危険もまた本物です。

大西さんは、自然の脅威から身を守ることを学ぶためには「子どもだましのキケンではダメだ!」と言います。

大西さんが大事にしているのは、子どもたちに潜在する能力です。「彼らには危険を察知する能力があり、その危険をさけて遊んだり楽しんだりする能力も持っています。本物の危険に直面すれば、自ずと気をつけるのです。擦り傷もしない高い安全管理の下では、子どもたちは、本来経験から学ぶべき能力をみがく機会を失っているのではないかと思います。」

私たちは、本当に危険な思いをすることがあるのでしょうか。

今の社会では、何をすることも作るにも、管理者や指導者は安全管理を一番に考え、考えに考えを重ねて計画を練り、実施します。その上で、さらに現場でも注意喚起していきます。こうなると、一概には言えませんが、どこが本当に危険なのかわからなくなっているのではないかと思えてくるのです。

大杉谷自然学校では、擦り傷から学ぶことで大きな怪我を防ぐような、生涯役に立つ知恵を子どもたちに身につけてほしいと願っています。



どうすれば燃えるのかなあ?!

過去から未来へ

大杉谷の地に展開する自然学校には、もうひとつの役割があります。地域に伝わる伝統文化や暮らし、そこに長く住んできた地域の人たちの英知を子どもたちに伝えていくことです。私たちが今の暮らしをふり返り、自然とともに生きることを考えたとき、長い時間をかけて昔から伝わってきたことを踏まえてこそ、これからの未来があるのではないかと、大西さんは言います。

現在、大杉谷地区は、260名ほどの人口しかなく、高齢化率は70%以上です。高齢化が進む中、今伝えなければ、大切に培ってきた知恵や技術が途絶えてしまうことが残念でならないと大西さんは嘆いています。

自然への畏敬

平成16年9月、台風21号が大きな被害をもたらしました。記録的な雨量により、宮川は氾濫、川沿いの斜面が相次いで崩壊し、土石流となつて川岸を押し流しました。今も川のおちらこちらにあるむき出しの岩肌はそのときの爪痕です。

「自然はすごい仕事してつたなあ。」

大西さんが、被災後に地域の人から聞いた、忘れられない一言です。山の崩壊により道路が遮断されて一部孤立状態になり、ライフラインもままならない状況の中、自然の驚異を目の当たりにしながらも自然への畏敬の想いを語られたことに、心底感動したと言います。

自然は作れるのか

幼児期は、たくさんを経験し、吸収できる時期です。その時期に、自然の中で暮らし、考えたりしないと、生涯自然と切り離されていくことが多くなってしまうのではないかと、大西さんは危惧しています。

昔は都会で暮らしていた人たちも、少なからず田舎で暮らした後に、都会に出たり、親戚がいる田舎と頻繁に行き来したりなど、自然をまったく知らない人は少なかったのではないのでしょうか。

しかし、今は、都市での便利な生活し知らずに育ってきた子どもたちが増

え、周りにも自然を知る人が少なくなりました。自然や地域の重要性は知っているものの、経験や知識が少ないのが現状です。

以前、出会った若者の一人が、自然界の浄化作用や生態系の機能などは、最先端のAI(人工知能)などの科学で作れるのではないかと考えていたことに大西さんは驚きました。

「科学技術の発達と、自然とともに暮らす経験の欠如からか、何であれ全て人間が創造主であるかのように考えている人がいる事実が驚愕しています。自然には、つながりや相互に及ぼす影響などなど、人間には計り知れないことや、科学では解き明かせないことがたくさんあるはずなのです。でも、こればかりは本物の自然がある暮らしの中にならぬと、自然の複雑さや神秘、驚異など感じることもできないのかもしれない。」

現代人から見ると、昔の生活はとても不便な、非科学的で迷信が多く、作り話ばかりのように思われるかもしれませんが、昔、科学が確立していなかった時代には、むしろ、生活に直結した経験に裏付けされた、理にかなった暮らしがそこにあったのです。自然や地域に根差し、受け継がれた暮らしと文化を大切に、常に帰郷していかなければならないと考え、大杉谷自然学校は取り組みを進めています。